スポーツ史資料
A．スカイノの『球技論』(1555) における「カルチョ競技」[1)]

楠　戸　一　彦

広島大学経合科学部保健体育講座

(1987.10.31 受理)

On the structure of the game "Calcio" as appeared in "Trattato del giuoco della Palla" (1555) by A. Scaino

Kazuhiko KUSUDO

Abstract

In the sixteenth century Europe, various ball games belonging to the type of "Football" were played, e. g. "Football" or "Hurling" in England, "Soule" in France, and "Calcio" in Italy. In the present research, an attention was specially focused on the game of "Calcio" in Italy, because the structure of this ball game has not been sufficently analyzed in contrast with the other games. The structure of calcio, which was so named because of the "ritual of beginning the game with a kick from the foot", was described in a famous treatise by Antonio Scaino ("Trattato del giuoco della Palla" (Venetia, 1555). The tasks of this paper is, first, to translate the texts of A. Scaino describing calcio into Japanese and, second, to analyze the structure of the game of calcio.

During the Japanese translation, some errors of the interpretations have been found not only in English translation by W. W. Kershaw but also in German translation by K. Koch, and they were indicated. In analyzing the structure of calcio, the differences between the game of calcio and "Association Football" became clear. The most significant difference between them consists in the rule of "Off Side" and the conducts of players. The rules of association football include an anticle of the "Off Side" and many articles of fauls. The rule of the "Off Side" was, however, never recognized in the game of calcio. Only throwing the ball was forbidden in the play of calcio. Therefore, this game appeared as the ball game, that presented "more than any other game a picture of a real battle", and that "the players falled in great disarray and upside–down" (by Kershaw).

1. はじめに

16世紀ヨーロッパの都市や農村においては，さまざまな球技が実施されていた。都市民と農民は戸外で行う「フットボール」や「ハンドテニス」などを愛好し，貴族は球技館で行う「コートテニス」を愛好した。これらの球技は国によって名称が異なり，身分や地域によっても競技の方

法が異なっていた。例えば，イギリスで「フットボール」(football) と称された球技と同様の構造を有する球技は，フランスでは「スール」(soule)，イタリアでは「カルチョ」(calcio) と呼ばれた。また，イタリアで同じように「カルチョ」と呼ばれた球技でも，フィレンツェとパドヴァではその方法が異なっていた[2]。更に，今日のテニスと同様の構造を有する球技でも，民衆はネットのない戸外のコートでボールを素手で打ち，貴族は球技館でネットをはさんでラケットを使用してボールを打った。

このように，16世紀のヨーロッパではさまざまな形態の球技が実施されており，しかも今日「フットボール」や「テニス」の範疇で理解されている球技も，地域や身分によって名称や方法が異なっていた。しかしながら，従来のわが国のスポーツ史においては，「サーヴィスの変遷」[3]や「オフサイドの成立過程」[4]に関する研究などが見られるにしても，16世紀のヨーロッパで実施され，今日「フットボール」や「テニス」などの名称の下で理解される個々の球技の具体的な構造が，十分に解明されているとは言い難い。そこで，本稿では，16世紀イタリアのパドヴァで行われていた「カルチョ」という球技を取り上げ，この球技の構造を解明することにする。

「カルチョ」というイタリア語は，現在では「サッカー」を意味している。しかし，このカルチョという球技は既に15世紀の末には行われており，16世紀にはパドヴァとフィレンツェのカルチョが有名であった[5]。この両者のカルチョを伝える史料としては，バルディの『フィレンツェのカルチョ競技について』(1580) [6]と，有名なA.スカイノの『球技論』(1555)[7]におけるパドヴァのカルチョに関する叙述とを挙げることができる。本稿では，スカイノの『球技論』を史料として，パドヴァのカルチョの球技的構造を明らかにすることにする。

1555年にイタリアのヴェニスで刊行されたスカイノの『球技論』は，図版も含めて376頁におよぶ大作であり，「球技の一般的規則」「個々の球技の形態」「運動の価値」を内容とする三部から構成されている[8]。この著作において論じられている「球技」(il giuoco della Palla) は，今日の「テニス」の範疇に属する球技を意味していた。即ち，彼は「球技」を次のように定義している。「球技は少なくとも二人の競技者による対抗競技であり，彼らは一箇所に集まり，特定の規則に従って，特定の配置で，ボールと呼ばれる良く弾み固くて丸い皮製の物体で試合を行う。この場合，各競技者はボールを仕留めようと全力を尽しながら（というのは，それに勝利が掛かっているから)，相手に向かってボールを打ち返し，しかもボールが空中を飛んでいる間か，一回弾んだ後か，弾むと同時に，打ち返す。即ち，競技者はボールが地面に落ちた瞬間に，つまりボールが地面に触れた後再び空中に舞い上がるや否や，ボールを相手のコートに再び打ち返す」[9]。この定義からすると，その名称が「ボールを足で蹴ることによって競技を開始すること」に由来する「カルチョ」(il giuoco del calcio) という球技は，「他の球技とは異なった異質の競技」ということになる[10]。従って，スカイノはこれを第二部の最後の章（「72章　カルチョ競技について」，282—286頁）で，いわば付録として論じているだけである。しかし，他方では，この僅か5頁にしかすぎないテキストも，「フットボール」に関する「最初の完全な記述」であった[11]。そこで，本稿では，スカイノの『球技論』の内容を分析する第一歩として，この「カルチョ」の章に焦点を当てることにする[12]。

以上のように，本稿の課題は，一方では16世紀ヨーロッパで実施されていた多様な球技の中で，イタリアの「カルチョ」という球技の構造を解明することにある。他方では，球技に関する最初の著作といわれるA.スカイノの『球技論』の内容を分析する第一歩として，「カルチョ」に関するテキストを分析することにある。そこで，本稿の前半ではこの著作のカルチョ競技に関するテキスト全文を邦訳し，後半ではこのテキストの解釈を通じてカルチョの球技的構造を明らかにすることにする。

2. A.スカイノの「球技論」における「カルチョ競技」の邦訳

邦訳に際して利用したのは，オーストリアのウィーン国立図書館が所蔵している作品（マイクロ複写）である。16世紀のトスカナ語で作成されている『球技論』に関しては，W.W.カーショウが1951年に英語に翻訳している[13]。また，コッホは「カルチョ競技」に関する章だけをドイツ語に翻訳している[14]。邦訳に当たっては，これら二つの翻訳を参考にした。

カルチョ競技に関するスカイノのテキストには，段落が設けられていない。しかし，本稿では史料紹介という観点から，原典のテキストを一文ごとに邦訳し，訳文の後に原典のテキストを挿入することにする。邦文における［ ］内の語は訳者の挿入である。原典の（ ）内の数字は頁数である。原典の解釈の上で，カーショウとコッホの解釈と異なる解釈，及び次節の「カルチョの球技的構造」で論じない問題に関しては，注を施した。

「第72章　カルチョ競技」(Parte del giuoco del calcio) 邦訳

カルチョ競技について述べることが残っている。この競技は今まで述べてきた競技とは非常に異なっているので，私はこれを論じることを最後の章に残しておいた[15]。((282) Resta[16] a parlare del giuoco del calcio, da me a studio lasciato in questa ultima parte, per esser giuoco molto differente da glialtri, de' quali s'e regionato fin hora.)

ところで，この競技は膨らませたボールで行われる。このボールは重さがせいぜい10オンスで，直径が7インチであり，拳［で打つ球技］のボールよりはるかに柔らかくて，しなやかである[17]。競技場の大きさは，［長さが］腕力の強い者が石を投げても一方から他方へと届かないほどであり，幅はそのほぼ半分である。［競技場は］各周囲が壁で囲まれていると，非常に適している。私は，パドヴァの闘技場ほどこの競技に適した競技場を見い出すことができるとは思わない。ここでは，四旬節の時に，学生たちが，大群衆と共にこの競技を行うのが慣例であった[18]。この競技は各組20，30，40人で行われ，競技場の広さと優秀な競技者によっては，もっと多い人数でも行われる。(Si fa dunque questo giuoco con Palla da uento di peso oncie dieci alla sottile, & di diametro sette oncie, molto piu molle, & piu pastosa di quella da pugno; in luogo grande, talmente, che con un tratto di pietra, di braccio quantunque gagliardo, dall'un canto all'altro giugnere non si possa, di larghezza poi quasi la meta manco, & se fia cinto di muro d'ogni intorno, riesce molto accommodato, ne credo, che campo a cio piu acconcio si possa truouare dell'arena di Padoua, doue i Scolari a tempo di quaresima, con grandissimo concorso, sono soliti di esercitar questa battaglia, laqual si puo fare sendo uenti, tenta, & quaranta persone per parte, & con piu numero anchora, secondo la grandezza del luogo e'l ualore de i giuocatori.)

ここでは，サーヴィス・ラインもフォールト・ラインも，その他のこのような境界も存在しない[19]。また，別の球技で遵守されるように，シングル競技やダブルス競技や激しい競技の配置に応じた4つのカッチアによる勝利の獲得も行われない[20]。囲まれた競技場の長い方の両サイドにだけ，特定の場所が限定される[21]。競技の勝者になろうとすると，各々の組は相手のサイドの場所へボールを押し込まなければならない[22]。(Qui non il segno principale, non quello del fallo, ne altri cotali termini si fanno, ne si rinchiude il fine della uittoria in quatro caccie, secondo la dispositione del giuoco semplice, del doppio, & del rabbioso, si come si osserua ne gli altri giuochi della Palla: solamente da ambe due l'estreme parti, secondo la lunghezza dello steccato, si circonscriue certo spa＝(283) tio, dentro alquale hanno a cacciar la Palla quelli, che uogliono esser i uin-

citori della battaglia, concordeuolmente ciascuna parte dal canto dell'altra.)

ここでは，ボールを素手や補強した腕や，何か別の道具の柄で打つことも追求されない。また，ボールを空中で，あるいは一回弾んだ後で打つとか，ボールを一定時間持ってはならないとか，ボールに二度触れてはならないとか，いうことも追求されない[23]。別の球技に対応するこれらの規則と構造とは，より秩序があり精巧な本当の［球技］において作られている。[24]。しかし，各競技者は決していかなる武器も持たないで，競技しなければならない。また，ボールが空中にあっても，1回・2回あるいはそれ以上弾んだ後でも，体の都合のよい部分や同時に複数の部分で，ボールを打ってもよい。さらに，ボールが地面を転がっている間に足で蹴ったり，2回あるいはそれ以上触れながら押し込んだり，取り上げたり，手に持ったりして，敵のゴール内側へ運ぶこと（これは光栄ある行為である）もできる。しかし，手に持っているボールを投げることだけが禁止されている。このことが生じた場合には，スカラムッチアに戻る。このように簡単な方法で競技するということによって，私はこのカルチョ競技が恐らく最古の競技の一つであり，古代人がボールを利用して行った競技に少なくとも類似していたであろう，ということを容易に信じる。というのは，（画家が行うように）通例，人間は物事を先ず大雑把に描き，そのあと時間をかけてより秩序正しく精巧にするからである。さらに，雄弁なボッカチオはバロンチ家についての愛らしい短編の中で，このことをわれわれに信じさせてくれる[25]。(Ne ancho qui si ricerca, che la Palla sia battuta con la mano aperta, o con il braccio armato, o con presa d'alcun instrumento, che di posta, o dopò il primo balzo sia percossa,che per tempo sensibile non si tenga in mano, ch'in lei non si faccino duoi tocchi, leggi, & ordini, & constitutioni appropriate a gli altri giuochi della Palla, fatti in uero sotto piu ordinato artificio : ma è tenuto ciascun giuocatore entrar a questo giuoco senza armatura di sorte ueruna, sendo in sua potestà di batter la Palla, con qual parte piu a lui piace della persona, & con piu parti insieme, quando ua per l'aria, dopò il primo balzo, dopò il secondo, & in tutti gli altri, & con i piedi la puo urtare, mentre ua ruotando per terra, la puo con duo, & piu tocchi cacciare, pigliarla, tenerla in mano, & portarla (ilche è glorioso fatto) dentro al segno de'nimici, solamente è uictato presa in mano giettarla, & quando questo auuiene, si torna alla scaramuccia, dal qual modo di giuocare cosi semplice io facilmente m'induco a credere, che questo giuoco del calcio sia forse uno de i primi giuohi, o che un simigliante almeno fusse quello, ch'usassero di fargli antichi con questo instrumento della Palla, sendo ordinario de gli huomini abbozzar prima le cose grossamente (si come fanno i Pittori) & poscia quelle con tempo ridurre a piu esquisito ordine, & a maggior arti=(284)ficio, ilche ci diede anchor ad intendere l'eloquentissimo Boccaccio in quella sua leggiadra nouella de'baronci.)

そして，ガレノスが取り扱っている競技もカルチョ競技であったのではないかと，思われる[26]。このことは，彼がこの競技を小さいボールによる競技であると明確に呼んでいないのであれば，十分にありうることである。というのは，カルチョのボールは小さいボールではなく大きいボールに属するからである。それはともかく，スカラムッチアは次のように始まる。(Et il giuoco di cui tratta Galeno è parso ad alcuni ch'ei sia questo del calcio, cosa assai uerisimile, qualhor il detto autore non lo chiamasse determinatamente il giuoco della picciol Palla, sendo la Palla del calcio non picciola, ma fra le maggiori; ma sia come si uoglia, allo scaramucciare dassi principio in questo modo.)

競技場は等しく二分され，その中央にボールが置かれる。敵対する競技者は特定の制服で区別され，これによって戦いの間でも互いに識別することができる[27]。太鼓またはラッパで合図がなされると，選挙又はくじによってボールに触れる最初の者と決められた競技者が，ボールを蹴り

出す。この行為は，即座にスカラムッチアの開始と判断される。その後は，双方の組はボールを取り上げたり，打ったり，敵のゴールに向かって押し込むことが許される。足で蹴ることによって競技を始めるこの儀式のために，恐らくカルチョ競技と名付けられたのであろう。[28]。(Diuiso il campo in due parti uguali, & nel mezzo posta la Palla, distinti i giuocatori, che sono di contraria fattione, con qualche assisa, per laquale nel fatto del combattere si possono insieme riconoscere, dato il segno a suon di tamburo, o di trombetta, uno de i giuocatori, a cui tocca d'esser primo, o per elettione, o per sorte, batte la Palla con un calcio, ilche fatto s'intende subito attaccata la scaramuccia, talche poi è lecito si all'una, come all'altra parte pigliar la Palla, batterla, & cacciarla uerso il segno de gli auuersari, dal qual rito d'incominciar questo giuoco con calcio di piede, forse è stato nominato giuoco del calcio.)

競技で必要な秩序のために，各々の組には隊長がいる。彼は競技の主要な支配をし，適切な競技者を選出しなければならない。何人かの者は良い走者でなければならず，何人かの者は敵の激しい攻撃を防御する力の強い者でなければならず，何人かの者はボールとの遭遇に巧みでなければならず，何人かの者はスカラムッチアの開始に巧妙でなければならない。この［最後の者］は前衛として戦いの前面に位置し，その後ろに力の強い競技者が，彼らの後ろに走者が位置しなければならない。後衛はボールとの遭遇において，巧みで経験のある者でなければならない。彼らの所に戦いが達すると，それは古代人が戦闘について述べているように，第三列に到達したことを意味する。(Per ordine delquale è necessario, che da ogni banda sia un Capitano, c'habbia il principal gouerno della battaglia, ilqual farà scelta d'accommodati giuocatori, alcuni de'quali siano buoni corridori, altri gagliardi per resistere all'impeto contrario, altri dotti ne gli incontri della Palla, & alcuni astuti per appizzar la scaramuccia, et questi staranno nella fronte della battaglia per antiguardia, dietro a iquali saranno posti i gagliardi giuocato＝(285) ri, & dietro a questi i corridori ; la retroguardia haueranno i dotti, & espermentati ne gli incontri della Palla, a'quali toccando il combattere s'intenda il fatto esser peruenuto a i triarij, si come ne i fatti d'arme soliti erano di dir gli antichi.)

前衛は非常によく密集して，固まらなければならない。力の強い者は競技場の側方に広がりながら，若干間隔を開けて位置し，走者はさらに間隔を開けて位置し，第三列は最も間隔を開けて位置しなければならない。全体の配置は三角形の形をしており，頂点には前衛が位置し，底辺は競技の第三列で閉じている。(L'antiguardia stia molto bene unita, & insieme serrata, in gagliardi siano disposti con ordine alquanto piu raro, allargandosi, & distendendosi dal fianco dello steccato, piu rari anchora stieno i corridori, & rarissimo ordine habbiano i triarij : & sia tutta l'ordinanza in forma di triangolotal, che la cuspide sia nell'antiguardia, & la basa si chiuda nei triaij del giuoco.)

戦いにおいては，競技者たちは配置を放棄することなく，競技場の幅に応じて，ボールを見ながら進むように，動かなければならない。(Nel combatter tutti i giuocatori si muouerano, inclinando, ben però con seruata pro portione, uerso quella parte, allaquale secondo la larghezza del campo incaminarsi la Palla uedranno.)

前述のように勝利の境界である一方のゴールにボールが偶然に接近すると，その組の競技者は非常に良く互いに団結しなければならない。その場合，力の強い競技者は敵を打ち破り，撤退させるために特に勇敢さを示さなければならず，それが職務である。(Et sendo condotta per sorte la Palla molto uicina ad uno de'segni, che sono i confini della uittoria nel modo, che s'è detto di sopra, quelli, iquali saranno da tal canto, hanno ad unirsi insieme molto bene, & in tal fatto è mes-

tiero, che'l lor ualore principalmente adoprino i gagliardi giuocatori, per romper, & far ritirar a dietro la parte nemica.)

特にこの競技において適切なことは，他の競技者の前に位置している競技者が，自らボールを打つ良い機会がないならば，後に位置する競技者にボールを放して，その間に敵が前進するのを妨げるよう敵に立ち向うことである[29]。(Particularmente in questo giuoco conuiene, che quelli giuocatori, che sono posti dinanzi de gli altri, se essi non hanno bella occasione di dar il colpo, lascino la Palla a quelli, che sono posti di dietro da loro, affrontandosi fra tanto con gli auuersari per impedir loro il pigliar campo piu sotto.)

何人かの力の強い者は，ボールを手に持って競技場を走り抜ける走者のために，側面に位置しなければならない[30]。前衛に属する彼らは，走者が自由で妨害のない走路を確保できるように敵に立ち向う。走者は空間と機会とを得ると，敵のゴールの中まで走る。しかし，彼は敵の余りに大きい集団に攻撃されることが分かると，躊躇することなく走る速度を落とし，即座に別の方法よりも足でボールを蹴る。この方法の方が簡単に妨げられず，安全である。(Al corridore, ilqual sia per correre il campo con la Palla in (286) mano faranno ala alcuni de i gagliardi, & quelli dell'antiguardia affrontandosi con gli auuersari, perche'l suo habbia ispedito, & franco passaggio, & esso corridore hauendo campo, & occasione, correr à insino dentro al segno de' nimici, ma ueggendosi da troppo grande squadrone assalito, si raffrenar à dal corso, & senza perder punto di tempo, batter à la Palla, & piu tosto con calcio di piede, che in altro modo, perche'l colpo in questa guisa è piu sicuro, come quello, che meno si puo impedire.)

このカルチョ競技は，他の球技に見られるような非常に稀な精巧さにまで工夫されてはいないが，それにもかかわらず非常に普及した競技であり，特に観衆に大きな楽しみをもたらす。この競技では，他の競技よりも本当の戦闘の姿が常に変化しながら示される。競技者たちはあちこちで倒れかかり，上になったり下になったり，ひっくり返る。さらに，他のいかなる競技よりもこの競技では，優れた走者と格闘において巧みさと強さを持った競技者の価値が認められている。

(Qusto giuoco del calcio quantunque egli nonsia ordito sotto tanto raro artificio, quanto si truoua ne gli altri giuochi della Palla, è nondimeno giuoco molto uago, & che arreca principalmente a spettatori gran piacere, in questo piu che in alcun'altro rappresentandosi quasi una imagine di uera battaglia, nella quale spessissime uolte, quinci & quindi uanno i giuocatori con grandissima ruina sozzopra riuolti, & sendo giuoco, nel quale piu, ch'in tutti gli altri della Palla si scorge il ualor de'buoni corridori, & di quelli ch'alla lotta sono destri, & prssenti.)

3.　「カルチョ競技」の構造

スカイノによればカルチョという競技は「非常に普及した競技」であった。しかし，このカルチョに関する彼の説明は，当時イタリアで非常に普及していた「カルチョ」と称される球技の共通的な要素を取り出して記述したもの，と理解されてはならない。というのは，前述のように，フィレンツェで実施されていた競技はカルチョという名称を有しながら，その構造は異なっていたからである。むしろ，前節のテキストが示すように，スカイノはパドヴァにおいて謝肉祭の時期に学生によって行われていたカルチョを念頭において，この球技を説明したものと推論される。従って，スカイノの記述を当時イタリアで行われいたカルチョ全般に関する記述と，理解してはならないだろう。

さて，本稿の課題はイタリア・ルネサンス時代のカルチョの社会的機能，あるいはカルチョに対するスカイノの評価を分析することではなく，スカイノが説明したカルチョという球技の構造

を分析することである。カルチョの球技的構造の分析においては，現代の「サッカー」の規則に見られる構造をモデルとしている。というのは，一方では，現代のイタリア語の「カルチョ」がサッカーを意味しており，同時に従来のスポーツ史においてはイタリア・ルネサンス時代のカルチョが「フットボール(サッカー)」という球技の範疇の中で論じられているからである。他方では，球技的構造，つまりある球技を構成する諸要素とその諸連関は，その球技の規則において具体化されているからである[31]。

カルチョの構造

1）[競技場]。カルチョが行われる場所の大きさは，長さ＝「腕力の強い者が石を投げても届かない距離」×幅＝「長さの半分」である。現在のサッカーの競技場の大きさが長さ＝90－120m×幅＝90－45mであることを想起すれば，カルチョの競技場の大きさは今日のサッカーの競技場にほぼ相当していると推論される。競技場の空間的限定は，今日のように「ライン」によって行われるのではなく，「柵」によって行われたようである。というのは，スカイノはゴールに関する記述のテキストで，「中世のトーナメントなどのための柵で囲んだ場所」も意味する「steccato」という語を使用しているからである。しかし，スカイノは「各周囲が壁で囲まれていると，非常に適している。パドヴァの闘技場ほどこの競技に適した競技場はない」とも述べている。いずれにしても，カルチョが実施される場所は柵あるいは壁で境界づけられていたと推論される。ゴールは，今日のエンドラインに相当する箇所に，「特定の場所が制限される」ことによって定められた。しかし，ゴールの大きさは不明である。

2）[ボール]。カルチョで使用されるボールは中空で，「重さがせいぜい10オンス，直径７インチ」である。このローマオンスとローマインチを現代のメートル法で換算すれば，直径約17cmと重さ約270ｇになる。このボールの形状は，「柔らかくしなやかである」。また，ボールの材質は不明であるが，例えば「パッローネ」で使用されているボールの材質から推測すると，動物の皮（山羊の皮？）から作成されたものであろう[32]。

3）[競技者]。カルチョに参加できる競技者の人数は，各々のチームで「20，30，40名」であった。更に，競技場の大きさによっては，競技者の数は増大された。この人数は今日のサッカー（11名）あるいはラグビー（15名）と比較して多いのであるが，後述するように競技者の配置がまったく無秩序であったのではない。

4）[競技者の用具]。ここでは，競技者が「特定の制服」によって区別されることが言及されているだけである。この制服が特定の色を有していたのかどうか，不明である。また，靴に関する言及はないが，競技場に「いかなる武器も」持ち込むことは禁止されている。

5）[審判]。スカイノはカルチョの「審判」に関しては，何も言及していない。しかしながら，「競技での必要な秩序のために，各々の組には隊長がいる。彼は競技の主要な支配をし，適切な競技者を選出しなければならない」というテキストから，次のような解釈が成立するであろう。つまり，この隊長が「審判」の役割を果たしていたのではないか，という解釈である。というのは，「隊長」が競技の「必要な秩序」あるいは「主要な支配」を配慮しなければならないからである。

6）[競技時間]。競技時間に関する言及はない。また，カルチョがどのようにして終了するのか，不明である。例えば，一定時間内に得点の多い方が勝ちなのか，一定の得点に早く達したほうが勝ちなのか，あるいは「勝ち負け」を問題にしていなかったのか，などの点は不明である。

7）[競技開始]。競技の開始は，「足でボールを蹴る」ことによって行われた。この競技開始

の方法が「カルチョ」という名称の由来であると言及されているのであるが，どちらのチームが先にボールを蹴るのかという方法に関しては何も言及されていない。ボールを最初に蹴る競技者が「選挙またはくじ」によって決められるというテキストは，チームの先攻・後攻を決める方法ではなく，最初に蹴るチームの競技者を決める方法であると解釈されるべきである。また，競技開始の合図は，「太鼓またはラッパ」であった。この合図をする人達のカルチョにおける役割は，これ以外には不明である。

8）[インプレー]。ボールが競技場の外に出た場合の方法に関しては何も言及されておらず，まったく不明である。従って，今日のサッカーにおける「スローイン」などの規則は示されていない。

9）[得点]。ゴール，つまりエンドライン上の「制限された特定の場所」に，「ボールを押し込む」ことによって，得点とみなされた。ただ，前述のように，この得点によって競技が終了するのか，あるいは続行されるのか不明である。また，得点のあと「エンドの交代」が行われたのかどうかも不明である。さらに，後述するように，「ボールを押し込む」場合には，ボールを蹴ることや手で打つことによっても押し込まれたが，特にボールを持ってゴールに運び入れることは「光栄ある行為」であった。

10）[オフサイド]。カルチョでは，今日のサッカーやラグビーの規則に規定されているような「オフサイド」に関するいかなる規則も存在しなかった。

11）[反則と不正行為]。カルチョでは，前述のように競技場にいかなる武器も持ち込んではならなかった。しかし，この規定に違反した場合の罰則に関しては，何も言及されていない。競技においては，ボールを打つこと，蹴ること，持ち運ぶことは許されたが，「手に持っているボールを投げること」だけが禁止されていた。この行為が生じると，「スカラムッチア」に戻された。スカイノのテキストを解釈する限り，このスカラムッチアは「競技の開始」を意味している。従って，テキストの文脈から推論すれば，「投げる」という反則行為が生じた場合には，競技開始の時点の配置に戻り，ふたたび「ボールを蹴る」ことによって競技を再開することになる。しかし，「スカラムッチア」（英語の「skirmish」）が字義通り「小競り合い」を意味すると解釈すると，罰則としての「スカラムッチア」が競技の中でどのように処理されたのか，スカイノのテキストからは解明することはできない。さらに，スカイノのテキストからはボールを投げるという行為以外の行為に関するいかなる罰則も見い出されない。従って，ボールを持っている競技者に対する「タックル」などの規定も言及されていない。

以上「カルチョ」という球技の構造を規定している諸要素を，今日の「サッカー」をモデルとして再構成した。しかし，スカイノはカルチョに参加する競技者の配置あるいは役割分担にも言及している。

12）[競技者の配置]。カルチョでは競技者の配置が定められており，各競技者はこの配置を放棄してはならなかった。各競技者の配置は次の通りである。(a)敵に対して最前列には，「スカラムッチアの開始に巧みな競技者」が位置した。(b)次の列には，「敵の激しい攻撃を防御する力の強い競技者」が位置した。(c)次に，「良く走る競技者」が位置した。(d)最後に，「ボールとの遭遇において巧みな競技者」が位置し，彼らは「第三列」と呼ばれた。各々の競技者は，第三列を底辺とする三角形をなして位置した。しかも，最前列の競技者は「密集して」位置し，後ろの列になるほど横に間隔を開けて位置した。（表1．参照）

13）[戦術]。各競技者は競技の進行においては，「配置を放棄することなく，競技場の幅に応じて，ボールを見る方向に進むように動かなければ」ならなかった。走者は，ボールを持って敵のゴールに向って走るのが職務であった。その場合，彼は敵の攻撃を受けそうになると，ボール

表1．競技者の配置

```
(d)*     *     *     *     *
(c)   *   *   *   *   *
(b)      *  *  *  *  *
(a)         *****
              (o)○
(a)         *****
(b)      *  *  *  *  *
(c)   *   *   *   *   *
(d)*     *     *     *     *
```

(a)前衛　(b)力の強い技者
(c)走者　(d)第三例　(o)ボール

を蹴ることによって，ボールを相手のゴールに近づけなければならなかった。また，力の強い競技者は走者の側面に位置し，走者が自由に走れるように，「敵を打ち破り撤退」させねばならなかった。さらに，ボールを持っている競技者は，敵に攻撃されそうになると，後ろにいる味方にボールを放して，自らは敵の前進を防御しなければならなかった。

4. おわりに

本稿の課題は，A.スカイノの『球技論』における「カルチョ競技」に関するテキストの邦訳と，このテキストの解釈を通じてのカルチョの球技的構造の分析であった。テキストの邦訳においては，カーショウの英訳とコッホのドイツ語訳とにおける幾つかの解釈上の誤りが指摘された。他方，カルチョの球技的構造に関しては，現代のサッカーをモデルにしながら規則と戦術の二つの側面から分析が加えられた。この分析の結果，サッカーとカルチョとの間には，競技者数，競技時間，審判の有無，勝敗の決定，オフサイドの有無，インプレーとアウトプレーなどに関する差異が明らかになった。とりわけ，両者の基本的な差異は不正行為の内容である。カルチョにおける不正行為は，「ボールを投げること」だけである。これに対して，サッカーにおいては直接フリーキックの対称となる不正行為に限ってみてもキッキング，トリッピング，ジャンピング・アット，ファールチャージ，バックチャージ，ストライキング，ホールディング，プッシング，ハンドリングと，多岐に渡っている。現代のサッカーと16世紀イタリアのカルチョとの間のこのような球技的構造の差異は，表2に示す通りである（この表では参考のために，16世紀後半にイングランドのコーンウォール地方で行われていた「ゴールへのハーリング」も挿入されている[33]。

注

1）本研究は，「近代イギリス・フットボール史」に関する鶴岡英一教授（岡山大学教育学部）との勉強会での議論の中から生まれたものである。スカイノのテキストの邦訳と解釈に対する鶴岡教授の示唆と批判に感謝したい。

2）パドヴァのカルチョに関しては本論を参照のこと。フィレンツェのカルチョに関しては注6を参照のこと。

3）稲垣正浩，『サービス』の歴史的考察，近藤英男（編）「スポーツの文化論的探究—体育学論叢（Ⅲ）」，タイムス，大阪，昭和56年，5—27頁。この論文ではスカイノの『球技論』に関する記述の引用は，残念ながらG.クレリッチ（虫明亜呂無訳）『テニス500年』（講談社，1978）からの孫引きである。スカイノの『球技論』における「サーヴィス」に関しては注19を参照のこと。

4）中村敏雄，オフサイドはなぜ反則か，三省堂，東京，1985。中村教授は本書の「第一章　オフサイド以前　2いろいろなフットボール」の中で，フランスの「スール」やイギリスの「ハーリング」と「ナッパン」などの球技的構造に言及しているが，イタリアの「カルチョ」に関しては単に名称を挙げるに留まっている。

5）メントナーによれば，イタリアでは1300年以前にはカルチョは行われていなかった。パドヴァのカルチョの起源は不明であるが，フィレンツェでは1491年（ブラシュケによれば1490年）にはカルチョの競技会が

表2．サッカーとカルチョとの比較

項　目	サッカー	カルチョ(1555)	ハーリング(1602)
競技場	大きさ(最大)＝長さ(90－120m)×幅(45－90m) ゴール＝幅7m32cm， 高さ2m44cmの空間	大きさ＝長さ(石が届かない距離)×幅(長さの半分) ゴール＝競技場長端の特定の筒所	ゴール間の間隔＝200—240フィート ゴール＝8—10フィート間隔の棒
ボール	外周＝68－71cm， 重さ＝396－453g	中空，重さ270g， 直径17cm	不明(動物の膀胱？)
競技者数	11人	20，30，40人	15，20，30人
競技者の用具	制服と規定の靴	制服	下着になる
審　判	主審と線審	不明	不明
競技時間	90分	不明	不明
競技開始	キックオフ	ボールを蹴る	第三者によるボールの投げ入れ
インプレー	ボールがゴールラインとタッチラインを完全に越えた時，アウト・オブ・プレーとなる	不明	不明
得　点	ボールがゴールラインを完全に越える	ゴールにボールを押し込む	ゴールへボールを持ち込む
オフサイド	オフサイドポジションにいる者が競技に参加しようとする	なし	なし
反　則	オフサイド，キッキング，トリッピング，ハンドリング，プッシング，ホールディング，ストライキング，ジャンピング・アット，チャージング，等々	ボールを投げること	前方へボールを投げること(fore-ball)，ベルトより下を掴むこと，2人で同時に攻撃すること，胸以外を「バット」すること，等々
競技者の配置	ツートップシステム，WMシステム，等々	前衛を頂点とし，力の強い者，走者，第三列と続く三角形の配置	マン・ツウ・マン

行われている。Mender, S., Das Ballspiel in Leben der Völker, Münster 1956. S. 76. Blaschke, Georg P., Geschichte der Ball=und Laufspiele. in G. A. C. Bogeng (Hrsg.) ; Geschichte des Sports aller Völker und Zeiten. Leipzig 1926. S. 340

6）Giovanni de'Bardi, Discorso sopra il giuoco del calcio fiorentino, Firenze, 1580. バルディのこの著書に関しては，T.E.モムゼンの論文と，ハードの部分的英訳がある。ハードによればバルディは「カルチョ」を次のように定義している。「カルチョは若人の二チームが手を使用しないで，足で行う公開のゲームである。彼らは，名誉のために丁寧な態度で，膨らんだボールをポスタから相手側のゴールへ通そうと競う。カルチョが行われる場所は，貴族の婦人達と民衆が十分立って見ることができるように，都市の主要な広場でなければならない。この広場は長さ77.4m，幅38.7m，高さ0.9mで，柵で囲まれていなければならない」。各チームの人数は27名であり，彼らは前衛15名，ハーフバック5名，クオーターバック4名，フルバック3名というように，配置についた。「バッラリオ」と呼ばれる役人が大理石にボールを投げるこ

とによって，競技が開始された。競技者はボールを手で打ったり，蹴ってもよいが，人間の高さ以上にボールを投げることは禁止されていた。得点がなされると，コートチェンジが行われた。Mommsen, T. E., Football in Renaissance Florence, in "Yale University Library Gazette", Vol. 16 (1941), pp. 14–19. Heard, W. B., Medieaval Football, in "The Badminton Magazine of Sports and Pastimimes", 14 (London, 1902), pp. 410–422. (ここでは pp. 411—412)。なお，バルディの著作は筆者未見であるので，フィレンツェのカルチョに関しては，稿を改めて論じることにする。

7) この著作のタイトルは，「Trattato del giuoco della Palla di Messer Antonio Scaino da Salo, diviso in tre parti. Con dve tavole, l'vna de' Capitoli, l'altra delle cose piu notabili, che in esso si contengono. Con privilegio」(サロ出身のアントニオ・スカイノ氏による球技論。三部構成。章と重要事項に関する一覧表つき) であり，1555年にイタリアのヴェニスにある「Gabriel Giolito de' Ferrari, et Fratelli」で印刷されている。この作品は「高名であらせられるフェッラーラのアルフォンソ・ダ・エステ閣下のために」という献呈文が示しているように，フェッラーラ侯国の領主であるアルフォンソに献呈されている。

8) スカイノの『球技論』に関しては，メールが詳細な内容紹介を行っている。ところで，スカイノの人物像は，メールの考察によってもそれほど明確ではない。ノエル＝クラークの『テニス史』(Noel, E.B., Clark, K. O. M., A History of Tennis, London 1924, Ⅱ. p. 283) の言及に基づいてメール (441頁) は，スカイノが1534年イタリア北部のガルダ湖に近いサロで生まれ，1612年に当地で死亡した，と指摘している。また，スカイノが著したアリストテレスの哲学に関する一連の著作から，彼は聖職者であったことが明らかになる。これに対して，『球技論』を英訳したカーショウ (注13) は「歴史的ノート」の中で，「聖職者にして神学者であるアントニオ・スカイノはガルダ湖畔のサロで1524年に生まれ，1612年に当地で死んだ。従って，この著作が出版された時，彼はすでに31才であった。」(p. xlv) と述べている。このように，スカイノの生年に関しては「1524年」「1534年」の二説があるが，没年は「1612年」である。

ところで，スカイノがこの著作を作成した意図は次の点にあった。「身体と魂に必要な優れて重要な運動であり，生気を純化し，それによってわれわれの魂を全く偉大にする」球技 (il giucoco della Palla) を，数学や詩学や修辞学などと同じような「学芸」(arte) として論じることであった。(Scaino, "Antonio Scaino a i Lettori")。Mehl, E., Antonio Scaino "Trattato del giuoco della Palla" (Venedig 1555), in "Leibesübungen und körperliche Erziehung", H. 19/20 (1937) S. 437–445, H. 21 (1937) S. 490–496.

9) スカイノ，前掲書，「2部3章　球技の定義 (Ditinition del qiucco della Palla)」(139頁)。スカイノはこの定義に妥当する球技を四つの観点 (ボールの形態，手の状態，打球具の形態，ネットの有無) から分類し，八つの種目の可能性を挙げている (「2部5章　球技の相違 (141—142頁))。更に，彼はこれらの可能性の中から主要な種目として，次の6つの球技を挙げている (145—147頁)。1)大きな中空のボールを拳で打つ「バッローネ競技」(giuoco del Pallone)，2)大きな中空のボールを「スカッノ」(Scanno) と呼ばれる道具を腕に着けて打つ「スカッノ競技」(giuoco della Palla da Scanno)，3)戸外で小さな固いボールを手で打つ「戸外で手で打つ競技」(giuoco della Palla da mano alla distesa)，4)戸外で小さな固いボールをラケットで打つ「戸外でのラケット競技」(giuoco della Palla da Rachetta alla distesa)，5)室内で網 (corda) をはさんで小さな固いボールを手で打つ「網による手の競技」(giuoco da mano con la corda)，6)室内で網をはさんで小さな固いボールをラケットで打つ「網によるラケットの競技」(giuoco da Rachetta con la corda)。(ボールの大きさに関しては，注32の表3を参照のこと)。

10) スカイノ，前掲書，140頁。

11) Beckmanns Sport Lexikon A–Z, Leipzig 1933, S. 978.

12) スカイノの『球技論』の内容の分析は別の機会に譲るとして，本稿では「カルチョ」の理解に必要な限りにおいて，この著作の内容に言及するに留める。

13) Scaino on Tennis, Transl. by W. W. Kershew, London 1951. この訳書は250部の限定出版であった。本研

究では，稲垣教授（奈良教育大学）が所有する「No.83」の複写を，教授の好意によって複写したものを使用した。

14) Koch, K., Die Geschichte des Fußball in Altertum und in der Neuzeit, Münster, Lit–Verlag 1983²(1895), S. 16–23. この論文は，最初「Monatschriften für das Turnwesen」という雑誌に掲載された((1894) H. 3. S. 65–73., H. 4. S. 105–115., H. 6. S. 163–174., H. 7. S. 198–208.)

15) スカイノは第一部２章で，「多くの地方で行われ，特にパドヴァでしばしば四旬節の間に学生によって行われるカルチョ競技は，われわれの論義から除外される。というのは，この競技は私がこれから論じようとする球技と一致しないからである」(16／17頁）と述べている。らさらに，第二部４章では「ここで，カルチョ競技が現在の論議から除外されていることが注目されなければならない。この競技はボールによって行われる他の競技と異なっているので，後に特別に論じることにする」(140頁）と，述べている。ここでいう「他の競技」とは，「テニス型球技」のことを意味している。注９を参照のこと。

16)「REsta」の頭文字である「R」は図を伴っている。正方形の枠の中に網を引っぱる裸体の二人の男性と太陽が描かれており，この図を背景としてRという文字が書かれている。『球技論』の各章の頭文字は図で飾られているが，この図はその章の内容とは関係ない。

17) メール（前掲書，491頁）によれば，１ローマインチ＝2.46㎝，１ローマオンス＝2.72ｇである。「拳で打つ競技」は「パッローネ」を意味している。カーショウは「重さがせいぜい８オンスである」と訳しているが，これは誤りである。

18)「大群衆と共に」と訳した原文は，「con grandissimo concorso」である。カーショウはこれを「大群衆の前で」(before a very large assemble)，コッホは「大群衆で」(in grossen Scharen)）と訳している。本稿では，原文の前置詞「con」（一緒に）を活かして「共に」と訳した。しかし，この箇所はテキストの文脈からして，カーショウのように「大群集の前で」カルチョが行われた，と解釈すべきであろう。

19) スカイノが論じたテニス型球技では，「サービスライン」(il segno principale)，コートの中央に設けられた「フォールライン」(il segno del fallo)，「サイドライン」(il segno descritto per fiano）の三種類のラインがあった（第一部28章「競技場の境界について」，29—38章でラインに関する競技規則が論じられている)。ところで，第一部２章「球技の一般的方法」(pp. 14–20)によれば，サーヴィスラインから「ボールを打ち始める（incominciano a batter la Palla)」ことによって，競技は開始された。このことと関連して，稲垣教授の主張する「当初のサービスは，サーバントが『主人のもっとも打ちやすいボールを投げ入れること』を意味していた」(前掲書，７頁）という言明を，スカイノの『球技論』を通じてテストすることは別の機会に譲りたい。

20) テニス型球技では「４つのカッチア」，つまり相手より４得点多く獲得した方が勝ちであった（第一部２章「球技の一般的方法について」)。

21) コッホ（前掲書，111頁）はエンドライン全体がゴールを構成していると解釈しているが，この解釈は誤りである。ただ，原文のテキストからは，ゴールの幅は不明である。

22) カーショウは「cacciar la Palla」を「ボールを投げる」と訳しているが，これは誤りである。というのは，「cacciare」という語は，「狩る，押し出す，押し込む，取り出す」を意味しているからである。しかも，この箇所を「ボールを投げる」と解釈すると，カルチョにおける唯一の不正行為である「手でボールを投げる」ことと矛盾することになる。

23) いずれもテニス型球技に関する規則である。(第一部２章「球技の一般的方法」)。

24) カーショウの英訳では，「fatti in uero sotto piu ordinato artificio」（より秩序があり精巧な本当の［球技］において作られている）というテキストが欠けている。

25) カーショウによれば，この短編は「デカメロン」の六日目の第六話を指している（「歴史的ノート」xlvii 頁)。この物語では，「フィレンツェの一番貴族らしい，一番旧家はどこか」という議論を巡って賭け

をしたスカルツァは，バロンチ家が「最も貴族らしく，最も旧家である」理由を次のように述べている。「諸君がバロンチ家の人の顔を御覧になると，ある者は非常に長く，狭い顔，ある者は度はずれに広い顔をもっており，……ある者は片方の眼がもう一つの眼より下がっている。それは子供が絵を習うとき，最初によく描く絵に似ている。だから，すでにいったように，神さまが絵を習いかけに彼らを作られたことがはっきり分かる。だから彼らは他の者より古く，従って貴族的なのだ」(野上素一訳，デカメロン(十日物語)(四)，岩波書店(文庫)，昭和49年，158—161頁)。

26) ガレノス (129？—199？) は『小球運動』(Peri tu dia tes mikras sphairas gymnasion) の中で，小球を用いた「ゲーム」ではなく，小球を用いた「運動」を医学的な観点から論じている。従って，彼はこの作品の中で古代の球技である「ハルパスツゥム」(Harpastum) を論じているのではない。ハルパスツゥムと現代のラグビーとの関係に関しては，Gardiner, N., Athletics of the Ancient World, Oxford 1920 (岸野雄三訳，ギリシャの運動競技，プレスギムナスチカ，1981) を参照のこと。

27) コッホは「con qualche assisa」を「何かある色によって」と訳しているが，これは誤りである。

28) コッホは「dal qual rito d'incominiciar questo giuoco con calcio di piede」(足で蹴ることによってこの競技を始める儀式のために) というテキストを，単に「このように」(Nach dieser Art) と訳しているだけである。

29)「ボールを放す」(lascino la Palla) という行為が地面に向けてボールを「放す」のか，味方の競技者に「手渡す」のか，このテキストからは不明である。

30) コッホの訳では「側面に位置する」(faranno ala) というテキストが欠けている。

31) サッカーをモデルとしてカルチョと比較する方法は，M．ウエーバーの理想型概念の論理的機能を念頭に置いたものである。詳しくは，拙稿の「スポーツにおける「規則」概念の分析—M．ウエーバーの「規則」概念の分析の手掛かりにして—」，広島大学総合科学部紀要Ⅵ．1986．pp. 1—10を参照のこと。サッカーの規則は次の規則書に基づいた。安田一男・上野俊幸，わかりやすいサッカーのルール，成美堂出版，東京，昭和61年。

32) スカイノは第二部の11章から14章 (151—160*頁) において，ボールと打球具の大きさと重さに言及している。注9で挙げた球技で使用されるボールの大きさと重さは，表3の通りである。メール (前掲書，491頁) によれば1ローマオンスは2,72g，1ローマインチは2,46cmである。

表3．ボールの比較

ボールの種類	直径		重さ		材料
パッローネ・ボール	1 F.1 U.	32.0 cm	30 U.	816 g	山羊の皮
スカッノ・ボール	3 1/2 U.	9.6 cm	9 U.	245 g	山羊の皮
ハンド・ボール	2 U.	4,9 cm	2 U.	54 g	十分伸びる皮
ラケット・ボール	1 3/5 U.	4,1 cm	1 U.	27 g	不明
カルチョ・ボール	7 U.	17,2 cm	10 U.	270 g	不明
現代のサッカー	外周 68—71 cm		396—453 g		皮

また，第二部6章「固いボールと中空のボールの相違」(pp.142—145) によれば，中空のボールには空気の入り口があり，空気入れでボールを膨ませた。この入り口には，小さな皮片で作られたクラッチ弁が設けられていた。さらに，ボールには膨みを保つために，ワインのような蒸発する液体が入れられた。

33) コーンフォール州の「ゴールへのハーリング」は，ダニングとシャドの著作 (Dunning, E. & Sheard, K.,

Barbarians, Gentlemen and Players, New York University Press, 1979, p. 35. 大西鉄之祐・大沼賢治共訳，ラグビーとイギリス人，ベースボールマガジン社，東京，1983，42—45頁）において紹介されている。（本稿では，カルーの記述に基づいた。Carew, R., The Svrvey of Cornwall, London 1602. pp. 73–74.）。ダニングとシャドはこの著作の第一章「現代ラグビー以前の民俗的ゲームとその衰退」（pp.21—45）において，「前工業化時代」の「ハーリング」「ナッバン」「フットボール」の社会学的分析を行い，民俗ゲームと現代スポーツとの構造的特質を比較している（pp. 33/34）。このような社会学的分析がイタリア・ルネサンス時代の「カルチョ」にも妥当するか，という問題に関しては別の機会に論じたい。なお，表２の作成にあたっては，鶴岡英一教授の未公刊ノート「Carew の Hurling」をめぐって」を参考にした。